

田富小だより

令和3年度
第6号
9月28日
田富小学校



回 覧

秋季大運動会実施に向けて！

令和3年9月25日、秋晴れの空の下、田富小学校令和3年度秋季大運動会を開催しました。9月12日付で山梨県に出されていたまん延防止等重点措置が解除され、9月初～中旬は、全国的に新規感染者の減少が顕著でした。運動会開催直前には、急激な新規感染者の増加もあり、人流ができることによる感染の拡大防止のため、一家庭2名までという制限の中での開催でした。保護者の皆様には、昨年同様、ご自分の子どもさんが演技・競技している種目に限り、観覧ゾーンにて観ていただき、そうでない時には、待機エリアで距離をとっていただくことにしました。また、保護者の皆さんから「トイレが混み合う」という意見をいただきましたので、総合会館南側にある仮設の臨時用のトイレもお借りしながらの実施となりました。これは、実



際には災害時の非常用トイレなのですが、保護者の密集を避けることができますし、非常時の参考にもできるという意味から、市のご協力を頂く中で使用することになりました。大変助かりました。ありがとうございました。また、トイレをはじめ、子ども達の活動エリアと保護者の皆様の活動エリアを交わらないようにし、児童が競技・演技後に校舎までいなくても手洗いでできるようにポリタンクの簡易水道と手指消毒用のアルコールも用意しました。児童席の間隔も昨年より更に広くとり、中学校からテントをお借りしながら密にならないように設置しました。先生達の様々なアイデアを有効に具現化しながら、考えられる限りの対策をとれたと考えます。人数制限にご協力いただいたご家庭の皆様、音楽や太鼓の音など長期にわたりご迷惑をおかけした近隣の皆様、子ども守り隊をはじめ、児童の教育のため様々なご支援をいただいている地域の皆様、本当にありがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。



運動会が子ども達にもたらしたものの

昨年から2年連続で半日開催となった運動会ですが、非常に多くの時間をかけて作り上げていく、一大行事です。特別日課がはじまった頃は、高学年の児童が「足が痛え（すみません、リアルに表現しています）」とつぶやく姿をよくみかけました。これが特別日課半ばくらいになると「足が痛え」が減っていき、例えば友達同士でリレーのことや表現の内容についての話が聞けるようになります。子どもたち自身がこの行事の中へ自ら入っていている証拠なのかもしれません。そんな中、ご紹介したい話があります。





【その1】 9月も下旬ですから、夕暮れも早く、もうすぐ日が沈むような時間帯でした。近所に住む田富小の児童がお母さんと思われる方、友達と連れ立ってリレーの練習に来ていました。はじめのうちはバトンゾーンの中でバトンパスの練習をしていたのですが、そのうち、児童も母も裸足になってトラックを周回する練習に変わっていきました。どうやら練習している児童は転入してきたばかりの外国籍児童のようでした。おそらく初めて臨む日本の運動会というものに様々な思いを抱いていたことでしょう。仲間たちとの連携がスムーズにできるように、バトンパスの練習に打ち込む姿がとても美しく、夕暮れの中でとても微笑ましい

と感じました。また、運動会の感想発表で、6年女児が、「自分が4年生の時に転校してきた頃は、日本語はもとよりいろんなことがわからなかったが、周囲のみんなが助けてくれたこと、今回の運動会でも級友が様々な面で助けてくれたこと、それがうれしく、素晴らしい思い出になったこと」など話してくれました。かけっこや集団演技を行う中で子ども達の心の中に本当に多くのことが生まれるんだなあと痛感しました。多くの時間をかけて実施してきた運動会の意義はこういったところにも確実にあるのだと再認識しました。

【その2】 もうひとつの話は、運動会前日のことです。この日は、それぞれのブロック（低・中・高学年の別）による表現運動の発表を相互に観るという機会を体育主任が設定しました。なぜなら、運動会当日、児童席にいるほとんどの子ども達は演技する姿を後方からしか観ることができないからです。他のブロックの子ども達がどんな演技を創り上げてきたのかを正面から実際に観ることができる大変貴重な時間でした。表現運動というのは、8時間ほどの時間をかけて少しずつ創られていきます。ブロックごとに行っているの、前年を経験している上級生が下級生に教える場面も本来ならば生まれるのですが、この感染状況下では、さすがに教え合う場面は設定できません。子ども同士による教え合いはほとんどありませんでしたが、子ども達は純粋に演技を楽しんでいるように見えました。はじめはたどたどしかった動きも、少しずつ上手になり、リズムに乗れるようになると、ひとつひとつの動作の細部まで自分自身の思いを表現するようになってくるのです。誰に教えられたわけではないのに不思議なものです。いい例が、中学年ブロックの子ども達が踊った「ロック粘土節」です。堤防を踏み固める動作の部分以外に、様々な振りがありますが、子ども達はその振りの意味を表現しているだけでなく、体の奥から湧き出てくるような感情によって表現しているように思えるのです。その姿はたいへん美しく、私も純粋に心を奪われました。ひょっとすると多くの水害に悩まされ、明治20年から行われた釜無川の大堤防改修の際に「お高さん」が歌った歌によって励まされた時に工事に参加していた人が体から湧き上がる意欲と近いものであるのかも知れません。総合的な学習で学ぶこの事実も運動会での表現活動を通して、よりよい理解が変わっていったのではないのでしょうか。



運動会を通して、子ども達は大きく成長してくれたと思います。こういった教育活動の真意をきちんと再確認しながら、感染症の脅威をも克服しながら、できる限りの活動を推進していきたいと深い秋の青空のもと強く感じました。

(※児童のプライバシー保護のため、被写体が大きく写された写真については、画像処理をしてあります。ご了承ください。)